

2025年8月10日 説教「名が天に書き記される」

ルカの福音書 10章 17～24節

70名の弟子たちは二人が組になって、派遣されていきました。イエスからねんごろな心構えを教えられ、彼らは働きをなしました。

1. 70人は喜んで帰り（17～20節）

—①悪霊どもでさえ（17）「さて、七十人が喜んで帰って来て、こう言った。『主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。』」

イエスによって遣わされた70人（72人という訳もある）は、命ぜられたように行動したでしょう。その結果喜びをもって帰ってきました。というのも、彼らがイエス・キリストの御名によって、人々の中に宿る悪霊に出ていく事を命ずると、そのようになったからでした。

②稲妻のように（18～19）「イエスは言われた。『わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。』」

それに対してイエスは驚くべきお答えをされました。「わたしが見ていると、サタンが稲妻のように天から落ちた」というのです。天での霊的戦いにサタンは敗れたということです。それは70名の弟子たちが宣教の中にある際に、蛇やさそりを恐れることもなく踏みつけ、敵の力に打ち勝つ権威を授けられたことにおいて現れています。

③悪霊ども服従するからといって（20）「『だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではありません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。』」

ここには注意が伝えられます。悪霊たちの服従したことで、御名を使ったからと自覚しているとはいえ、弟子たちは自らの力もあるかのように思い違いして、喜んではいけませんというのです。むしろ、自分達の名が救われた者として、天に書き記されていることを喜びなさいというのです。恵みによる救いと聖霊の力による働きを確認されたのです。

2. イエスは喜びにあふれて（21～22節）

①幼子たちに現わしてくださり（21）「ちょうどこのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。『天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵ある者には隠して、幼子たちに現わして下さいました。そうです。父よ。これらがみこころにかなったことでした。』」

イエスが聖霊によって喜びに溢れて言われた、というほどに特別の事として語ります。それは主イエスの祈りでもありました。父なる神を賛美した後、言われたのは、なされていることが学者たちによってではなく、力ない者に現わされたということでした。イエスはそれが御心だったとも言われました。

- ②子が誰であるかを知る父（22a）『**すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、子がだれであるかは、父のほかには知る者がありません。**』

ここには三位一体の神がイエスによって示されています。即ち、父なる神から子なる神イエスにはすべてが委ねられているということです。そのことの第一は、御子イエスが誰であるかについては、父なる神以外には決して知ることができる者はないということです。

- ③父が誰であるかを知る者（22b）『**また父がだれであるかは、子と、子が父を知らせようと心に定めた人たちのほかは、だれも知る者がありません。**』

第二には、父なる神が誰であるかを知っているのは、御子イエスと、御子イエスが父なる神を知らせようと心に定めた弟子たちであり、それ以外には誰もこの秘義を知ることはないとされるのです。

3. 預言者たちでさえ見られなかった方（23～24 節）

- ①見ていることを見る目（23）『**それからイエスは、弟子たちのほうを向いて、ひそかに言われた。『あなたがたの見ていることを見る目は幸いです。』**』

イエスは弟子たちのほうに向いて、重要なことを言われました。『あなたがたの見ていることを見る目は幸いです』と。ヨハネ 1:14 には「ことば（御子）は人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た」とありますが、ヨハネと弟子たちは人となった神イエスを見た、と証しています。ここではその方を見た目、それを持つ人は幸いだと言われるのです。

- ②見たいと願ったのに（24a）『**あなたがたに言いますが、多くの預言者や王たちがあなたがたの見ていることを見たいと願ったのに見られなかったのです。**』

イエスは言われるのです。メシヤ（救い主）については、その到来を預言し、待ち望んだ預言者や、ダビデのような信仰深い王たちが、どれだけ見たいと思っていたことか。しかし、彼らはその方を見ることはできなかったのです。ダビデは言っています。「私はいつも、私の前に主を置いた」と。これを使徒の働き 2:25 では「自分の目の前に主を見ていた」とあります。しかし、ダビデは霊的にメシヤを見ていましたが、肉体の目では見ることはできませんでした。

- ③聞きたいと願ったのに（24b）『**また、あなたがたの聞いていることを聞きたいと願ったのに、聞けなかったのです。**』

また、彼らは救い主イエスがお教えくださることを、直に聞きたいと願いましたが、それはできませんでした。預言者イザヤはこう伝えています。「私は主を待つ。ヤコブの家から御顔を隠しておられる方を。私はこの方に、望みをかける」（イザヤ 8:17）。メシヤ預言を数々させてもらった預言者は、その方と会うことを待ち望んでいましたが、それはできませんでした。

《結論》 今朝も三つのポイントについて教えられていきます。

第一に「名が天に書き記される」（20 節）というメッセージについてです。イエス・キリストは、弟子たちが御名によって悪霊を服従させたことを喜んでいて、それ以上に、名が天に書き記されていることを喜びなさいと言われました。ダニエル書 12 章 1 節には「しかし、その時、あなたの民で、あの書に記されている者はすべて救われる」とあります。黙示録 21 章 27 節には「小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、入ることができる」とあります。イエスは弟子たちが、その働きをすることを貴く考えつつも、天にその名が記されていることを喜べと言われます。そのことは、伝道によって、天にその名が記されるようになる人々との出会いが与えられることを祈り願っていくことをも勧めてもいるのです。私たちもキリスに導かれたことで、天にその名が記されたことを喜びとし、また、イエス・キリストの福音をますます広めていきたいと願われます。

第二に「賢い者ではなく幼子たちに現わし」（21 節）についてです。イエスは、福音が賢い者と思われる律法学者のような存在には隠され、幼子たちに現わされたことを喜んでおられます。幼子というのは、第一義的には子供たちのことですが、その意味は主なる神の前にへりくだる者たちのことです。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」（マタイ 5:3）とあります。「子どものように神の国を受け入れる者でなければ決してそこ（神の国）に入ることはできません。」（マルコ 10:15）ともあります。また、詩篇 51:17 には「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心」とあります。主なる神の前に自我が砕かれ、自らの罪を認めて神の前に出る者を主は喜ばれるのです。その点、自分の知識や知恵を振りかざして、己を立てようとする者を主は退けられます。むしろ、幼子のように素直に神の前に出てくる者を喜ばれるのです。今こそ、誰しも主の前にへりくだって、キリストに導かれて歩みましょう。

第三に「イエスを見ること、聞くことの幸い」（23 節）についてです。預言者や王たちは、メシヤ（救い主）を見ること、その教えを聞くことを望みましたが、かないませんでした。しかし、弟子たちは救い主イエスを生に見ること、聞くことが許されました。それはまさに幸いなることでした。それでは主イエスが天に昇られた後の人々はどうなのでしょう。イエスはこのように言われています。「あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。」（ヨハネの福音書 14:7）。これは今日の私たちにも適用できるお言葉です。キリストを信じ、キリストを知った者は、同時に父なる神を知るのです。まさにイエスこそ、「道であり、真理であり、いのち」である方です。この方を主と告白し、神はイエスをよみがえらせてくださったと信じるならば、人は救われるのです（ヨハネ 10:9）。私たちは、イエス・キリストを聖書を通して、見る、聞くことができるのです。イエス・キリストを主と告白する人は救われます。そして、それは何にもまして幸いなことなのです。この方を知らされていることをますます喜んでいこうではありませんか。